

令和2年度研究報告

例年は、2月に研究発表会を開催しておりますが、新型コロナウイルス感染拡大により、今年度につきましては、開催を中止とさせていただきます。そこで、ホームページにて、今年度の研究について、ご報告させていただきます。

1. 昨年度までの研究のあらまし

平成30年度には「研究部基本語い1200」と「語い指導再考」の2つのテーマについて、前者は基本語いの選定を行い、後者は新出語彙の導入方法の検討を行った。

令和元年度は、前年度の研究をさらに深め、「研究部基本語い1200」に生徒同士のやり取りで使用される語いがどのくらいあてはまるかを調査した。また、「語い指導再考」については、Nation (2001)の4 strandsに基づいて語い指導法を開発した。以上の研究内容は関東甲信越地区中学校英語教育協議会東京大会（令和元年11月15日）で発表した。

令和2年度は、生徒同士のやり取りにおける「英語で言えなかった単語」や感想のアンケート調査を行った。また、「語い指導再考」においては、前年度に開発した語い指導法の検証を行った。

2. 今年度の研究

今年度は、全国英語教育研究団体連合会（全英連）東京大会（新型コロナウイルス感染拡大により中止）の発表もふまえて、より広く充実した研究を目指して、語いリストグループと語い指導法グループの2つの分科会に分かれて、調査を進めてきた（3ページ以降に記載）。

- (1) 語いリストグループの研究について
- (2) 語い指導法グループの研究について

3. 今後の課題

3年間にわたり、2つの分科会に分かれて、生徒に身に付けさせるべき語いの選定と生徒が新出語に出会ったときにいかに深く学ばせるかという指導法について調査してきた。これらのテーマはこれからも探求すべき課題と思われる。

令和3年度から新しい学習指導要領による指導が始まる。小学校で学習する単語が600～700語、中学校で学習する単語が1600～1800語となるため、研究部ではこれらを踏まえた新しい語彙リストの作成、受容語彙・発信語彙の選別、授業における指導法等について、研究、実践を進めていきたい。

4. 参考文献

Nation, I. S. P. (2001). Learning vocabulary in another language. Cambridge University Press.

5. 研究部のホームページについて

研究部のホームページから、本研究で使われている「教科書語いデータ」および、これまでの「語いと英語教育」誌がダウンロードできるようになっています。

研究部ホームページ <http://www.eigo.org/kenkyu>

6. 研究発表

(1) 語いリストグループの研究について

① 研究動機・研究課題

令和3年度より中学校で全面実施となる平成29年改訂学習指導要領（以下、新学習指導要領）では、生徒に指導する語い数が1600～1800語程度に増加しており、小学校で指導する単語の数と合わせると、2200～2500語程度となる。平成21年改訂学習指導要領（以下、現行学習指導要領）で示されている指導する単語の数が1200語程度であったのと比較すると、中学校卒業時までには、生徒は約2倍の語いを指導されることになる。

この語いの増加に、今後どのように教師は対応し、生徒を指導していけば良いのかを考える必要があると考え、語いリスト部会は、3年間の研究を計画した。

② 平成30年度（1年目）及び平成31年度（2年目）の研究

1年目は、新学習指導要領における語い指導研究に向けた先行研究としての位置付けで、現行学習指導要領における基本語いを選定し、語彙リスト「研究部基本語い1200」を作成した。

2年目は、新学習指導要領の改訂ポイントの1つである「話すこと[やり取り]」に焦点を当て、生徒が即興的なやり取りにおいて使用する語いを書き起こして調査し、「研究部基本語い1200」との重なりやその傾向を明らかにした。

上記の1・2年目の研究の詳細は、東京都中学校英語教育研究会研究部ホームページ（<http://www.eigo.org/kenkyu/>）に掲載している研究紀要「語いと英語教育(42)～研究部基本語い1200と語い指導再考(1)～」及び「語いと英語教育(43)～研究部基本語い1200と語い指導再考(2)～」を参照されたい。

③ 令和2年度における研究（3年目）

当初は、2年目に分析したデータの信頼性を高めるために、引き続き、同様の方法でデータを収集し分析する計画だった。しかし新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、授業中に即興的なやり取りを継続的に実施することが難しくなったことから、方針を転換し、2年目の研究で実際に即興的なやり取りを指導した教師と、その指導を受けて即興的なやり取りをした生徒に対して、自由記述型の質問紙調査を実施し、KH Coderを用いて計量テキスト分析を実施した。ただし、本研究は臨時休校期間に実施したこともあり、回答数が十分でないことから、今後の研究に手法を生かすことを目的とする試行調査の色合いが強いことをご容赦いただきたい。

(ア) 研究方法・結果

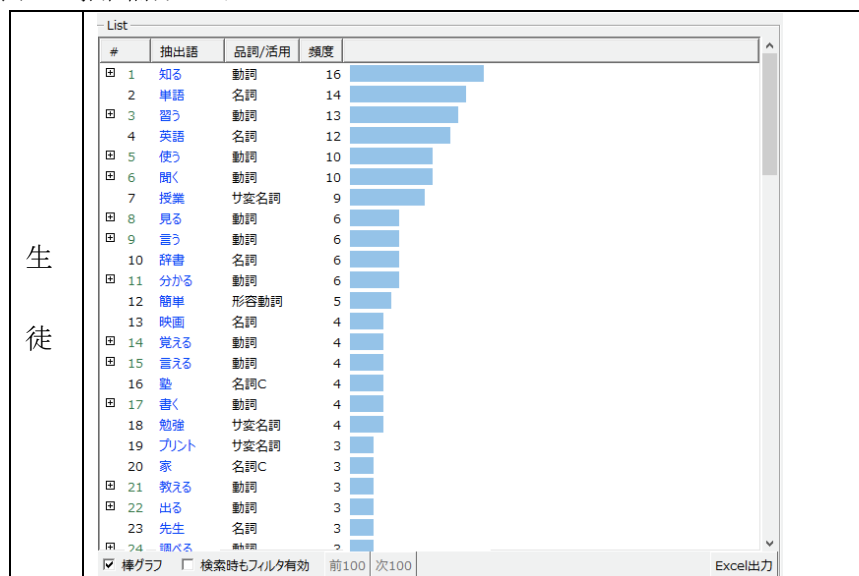
「英語での即興的なやり取りにおいて、英語で言えた単語について、考えられる理由を書いてください。」という質問に対して回答された自由記述を、KH Coderを用いて計量テキスト分析を実施し、「抽出語リスト」及び「共起ネットワーク」として出力した。なお、本調査では、教員アンケート7名と生徒アンケート2校の回答を調査した。

(a) 抽出語リスト

このリストは、自由記述回答に多く出現した順に単語が並べられている。「知る」、「使う」、「授業」、「覚える」といった語は、両者に共通してリスト内に含まれていた。

一方で、「辞書」と「プリント」は生徒に特有の回答語で、生徒は教科書以外のインプットからも発話に使う語いのヒントを得ていることを示唆している。また、「カタカナ」は教員の回答では出現しているが、生徒の回答では頻出語としてはリストに含まれなかった。これは、カタカナ語をより明示的に指導することで、生徒の発表語いをさらに広げることができる可能性を示唆している（表1参照）。

表1 抽出語リスト



List			
#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	単語	タグ	8
田 2	使う	動詞	5
3	英語	名詞	4
4	教科書	タグ	3
田 5	習う	動詞	3
6	インプット	サ変名詞	2
7	カタカナ	名詞	2
8	テレビ	名詞	2
田 9	覚える	動詞	2
10	活動	サ変名詞	2
11	教師	名詞	2
12	授業	サ変名詞	2
田 13	知る	動詞	2
14	日常	名詞	2
15	発話	名詞	2
16	A	未知語	1
17	and	未知語	1
18	Q	未知語	1
19	Talk	未知語	1
20	Teacher	未知語	1
21	やり取り	サ変名詞	1

棒グラフ
 検索時もフィルタ有効
前100 次100 Excel出力

教
員

(b) 共起ネットワーク

図1は、語の出現パターンの似通ったものを線で結んで、共起関係を表した図である。生徒側の図の「見る」に着目すると、「映画」「ドラマ」「テレビ」との共起関係が示されており、これらの映像を通して触れたことのある語は、即興的な会話でも使える可能性が高いことを示唆している。教科書を用いて生徒の語いを広げていくことの重要性は言うまでもないが、題材にまつわる映画やテレビ番組を視聴することが、生徒の発表語いの習得に好影響を及ぼす可能性を秘めていることが示唆される。

(2) 語い指導グループの研究の活動について

① 研究動機

『新学習指導要領』において、語彙の指導に関しては、小学校で学習した語に中学校では 1600～1800 語程度の新語を加えた語を指導するとあり、実際のコミュニケーションにおいて必要な語を中心に、中学校卒業時には、2200～2500 語の語いに触れさせることとなる。研究部では効果的な語い習得を目指すため以下のことに留意して、語い指導を考え、研究を行ってきた。

- ①音声→文字の順で指導する
- ②単語を文脈の中で意味やイメージをつかませた後に読ませる
- ③生徒に自力で本文を読ませる場合は、未習語が本文全体の語数の 2%程度になるよう新出語を導入する

初年度は新出語の指導法の工夫について、研究部部員が教科書本文の新出語を Oral Introduction と Explanation でどのように導入しているか、授業のデモンストレーションを行いながら分類した。次年度は指導法の工夫に加え、授業における効果的な語いの活動についてこれまで行ってきた活動を Nation の four strands に合わせて分類した。その結果、授業で行われている活動の中で meaning-focused output と fluency development が少ないことが分かり、新たな活動の開発や文献や研究部で行ってきたものから活動を発掘することが必要となった。また、指導の効果の検証として、生徒がスピーキング活動やライティングでアウトプットしたものをスクリプトとしてまとめ、どのように語いを使用しているかを研究すべきと考えた。

② 先行研究

(ア) 指導法の工夫

研究部部員が教科書本文の新出語を Oral Introduction と Explanation でどのように導入しているか、授業のデモを行いながら分類した。語い指導の具体的な指導方法におけるデータは以下のようなものである。指導の分類と具体的な指導例やそのように指導した理由をエクセルにまとめた。

	Oral	Expl	指導の分類	具体的な指導例や指導の理由
[A]				
air conditioner	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	絵や写真	写真を見せた
air pollution	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	日本語	
amazing	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	言い換え	It means surprising.
angry	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	ジェスチャー	手で鬼の角を表し、怒っていることを表現
anymore	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	辞書引き	文脈で予想しづらいため、辞書で調べさせた

(イ) 語いを使った活動の分類

授業における効果的な語い活動に関しては、Nation(2001)の four strands に当てはめ分類した。Nation の先行研究における four strands とは次のものである。

- (ア) meaning-focused input (内容にフォーカスを当てたインプット活動)
- (イ) meaning-focused output (内容にフォーカスを当てたアウトプット活動)
- (ウ) language-focused learning (言語要素にフォーカスを当てた活動)
- (エ) fluency development (既習の内容を使った統合的な活動)

研究部員が現状で行っていた活動を分類したものは以下のようなものであった。

(a) meaning-focused input (内容にフォーカスを当てたインプット活動)

活動	指導手順	授業者の感想
教師のスマールトーク	授業のはじめに時事的なことやその日にまつわる話をする。	授業で行う場合は生徒とやり取りしながら聞かせることが大切である。
副教材を使ったリーディング活動	トピックに関する簡単なやり取りを行ったあと、WPM を計らせながら本文を読ませる。その後、内容に関わる質問をする。	WPM を計らせることは速読にも効果的である。

(b) meaning-focused output (内容にフォーカスを当てたアウトプット活動)

活動	指導手順	授業者の感想
本文を活用したリテリング	本文の指導後、宿題でそのトピックについて調べさせ、データや自分の意見を含めたリテリングを行う。	新出語を実際に使わせながら行うため、生徒にとって語いが習得しやすい。
準備をしたスピーチ	教科書にあるプロジェクト活動としてあるものなどを使い、そのトピックについて辞書などを活用しながらスピーチを行う。	本文で出てきた表現や語いを使わせると効果的である。

(c) language-focused learning (言語要素にフォーカスを当てた活動)

活動	指導手順	授業者の感想
BINGO やフラッシュカード	新出語の復習として行う。フラッシュカードはコロケーションや反意語なども併せて指導する。	BINGO やフラッシュカードが新出語との初めての出会いにならないように留意する。
Definition Game	単元のまとめとして行う。新出語句をフラッシュカードなどで復習した後、ある単語の Definition を教師が言い、その単語を生徒が言う。	口頭で Definition Game を行った後に、プリントに英英辞書における Definition を載せ、単語を書かせると効果的である。

(d) fluency development (既習の内容を使った統合的な活動)

活動	指導手順	授業者の感想
Picture describing	Picture cardなどを黒板にはり、生徒に英語で描写させる。	英語が苦手な生徒が多い場合は、単語レベルから発話させると良い。
チャット	Sports や Food などあるトピックについて生徒に即興的にやりとりさせる。時間は1分間や2分間など学年や生徒の実態に合わせて行う。	新学習指導要領に向けて大変効果的である。会話を続けさせるために、つなぎ言葉などを指導すると良い。

③ 研究方法

(ア) 語いを使った新たな活動の開発と発掘

研究部員が meaning-focused output と fluency development の活動について新たな活動の開発と、文献やこれまでの紀要を読み活動の発掘を行った。

(イ) 効果の検証

生徒がスピーキングやライティングでアウトプットしたものをスクリプトとしてまとめ、どうしてその語いや表現を使えたかをインタビューし、効果の検証として研究した。

④ 結果

(ア) 語いを使った新たな活動の開発と発掘

研究部員が開発・発掘した活動は以下のようなものである。

Reporting

1. 目的

- ・既習の語いや言語材料を含む英語を繰り返し聞き、聞くことの技能を高める。

2. 進め方

- ①生徒は、2人ずつのペアになる。
- ②生徒のどちらか一人(生徒A)は、ALTのところに行き、ALTが話す英語を聞く。
- ③生徒Aは、自席に戻る。
- ④生徒Aは、ペアの生徒(生徒B)にALTが話した内容を伝える。
- ⑤生徒Bは、ALTのところに行き、ALTの話す同じ英語を聞く。
- ⑥生徒Bは、自席に戻る。
- ⑦生徒Bは、ペアの生徒(生徒A)にALTが話した内容を伝える。
- ⑧教員は生徒に英語で質問し、聞き取った内容の答え合わせをする。
- ⑨生徒Aと生徒Bの役割を交代し、①～⑧を再度行う。

3. 活動の留意点

- ・既習の語いや言語材料を含む英語を聞かせる。
- ・聞かせる英語の内容や話す速度を、生徒の習熟度に応じて調整する。
- ・生徒の学習状況に応じて、生徒に **report** (④) で使う英語の型を示す。
- ・可能であれば、教科書本文をモデルにして英語を作成する。

Fluency Development Reading

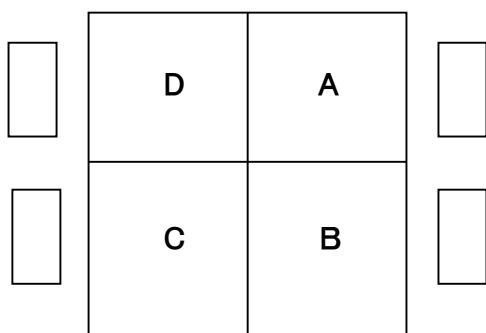
1. 目的

- ・読む時間を少しずつ減らしていき、黙読の時間において流暢性を高める。

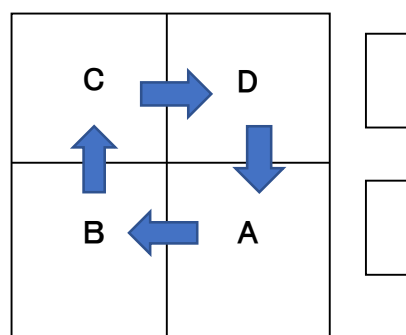
2. 進め方 (帯活動として行う)

- ① 4人グループになる。
- ② 4人それぞれが違う A～D のパッセージを 2分30秒で読む。
- ③ 読み終わったら、その内容を要約し、20秒で残りの3人に伝える。
- ④ 次時以降は読む時間を 2分15秒、2分、1分45秒と減らし A～D を順番に読んでいく。
- ⑤ 毎回 20秒で要約を伝える。毎回友達から要約を聞いているため、読む時間を減らしていても内容を理解することができる。

1日目



2日目以降



3. 留意点

- ・説明するときを使う単語に○、英文に線を引かせる。
- ・リーディング教材に載っている絵や写真は見せても構わない。
- ・英文の型を示す。

(例) This is a story about ~.

The writer said, “ ”.

First, Second, Third,

It means “ ” in Japanese. That's all.

- ・難しい単語や英文は簡単な英語に言い換えさせる。

Reading and Speaking for Fluency Development

1. 目的

- 様々な方法（目的）で読むことにより、黙読の流暢性を高める。
- 読む内容について何度も発話することにより、話すことの流暢性を高める。

2. 進め方（本文の導入から output までの流れ）

- ①ピクチャーカードを見せながら、本文内容を推測させる。（ペアワーク）
その際に **Pre-reading question** を与えて推測させる。
- ②本文内容に関するリスニングをさせる
- ③本文を読ませて②の答えの部分に線を引かせる（ペアで確認）
- ④ほかにどんな内容が書かれているかを読み取らせる（ペアで確認）
- ⑤答えに該当する部分を含めた **New Words** の確認
- ⑥音読（**Chorus reading / overlapping / Read & Look up / Buzz reading**）
- ⑦本文内容を要約する絵を描かせる
- ⑧⑦の絵を使って **Picture Retelling** する（ペアワークを何回かやらせる）
- ⑨本文を用いた **Output 活動**（**Skit, Personalization** など）

3. 留意点

- **Oral Introduction** は行わず、**Input** と **Output** を繰り返しながら何度も思考させる。
- リスニングタスクの答えに含まれるピクチャーカードは見せない。
- 要約の絵を描くことが目的にならないように、シンプルなものを心がけさせる。

Giving Directions Task

1. 活動の目的

- 道案内の表現を使わせることで、話すことの流暢性を高める。

2. 活動の行い方

- ①ワークシートを配布し、学校の中に宝を隠すとしたら、どんな宝をどこに隠すのかを決める。
- ②教師が **turn left, go straight/south/across** などの表現を確認する。
- ③生徒はワークシートに宝の場所までの道案内を書く。
- ④ペアになり、宝までの道案内とどんな宝かの説明をさせ、どこに隠したかとどんな宝かを当てさせる。

（イ） 効果の検証

生徒がスピーキングやライティングでアウトプットしたものとインタビュー結果は以下のようなものである。

①職場体験の報告より

生徒 A

I worked at Keikyu Kamata station. (教科書から) There I took care of people and greet them. (教科書から) It was exciting. (教科書から) I often stand at the gate to welcome customers. (教科書から、gate は辞書で調べた) I had a wonderful time. (教科書から) I learned a lot about stations there. (station は知っていた) In the future, I want to be a station staff. (station staff は辞書で調べた) I must study more. (教科書から)

生徒 B

I had my work experience at Watanabe car company. (教科書から) I helped Mr. Watanabe to repair the car. (先生に聞いた) I carried some industrial tools and tires. (辞書で調べた) Also, I greeted customers. (教科書を参考にした) I enjoyed them very much. (知っていた) I had a wonderful time. (教科書から) I learned the importance of greeting. (教科書の文を少し変えた) I will greet many people. (greet を辞書で調べた) I think repairing is very important. (repairing は辞書で調べ、その他は教科書を参考にした) In the future, I want to be a repairman like Mr. Watanabe. (repairman は辞書で調べた)

②将来の夢より

生徒 C

I want to be a pianist. Do you know why? (教員が例を示した) I have two reasons. (教員が例を示した) First, I like playing the piano. I want to do it even when I grow up. Second, I'd like to make a lot of people smile with my performance. (生徒が調べた) I am very happy if many people are pleased. (生徒が調べた) To be a pianist, I will practice playing the piano a lot.

生徒 D

I'd like to talk about my dream. (既習の表現) I want to be a doctor. (既習の表現) When I was ten years old, I caught pneumonia. (生徒が調べた) My doctor cured me then. (生徒が調べた) I was very happy. (既習の表現) I want to help many people as a doctor. (既習の表現) Thank you for listening.

③私の好きなことより

生徒 E

My favorite movie is "Forrest Gump." It's a story about a hero's life. My mother recommended it to me. I watched it this year. I think this movie is the best (授業で説明した) because the story is very interesting, funny and impressive. (教科書から) The most interesting point of this movie is the hero. The hero's name is Forrest Gump. He's really gentle. He has a girlfriend. She is a very beautiful woman. I want you to watch this movie. And don't miss the story. (教科書から) If you watch this movie, you'll have good memories.

生徒 F

My favorite singer is King & Prince. It is a group of six guys. I have two reasons. (既習の表現)

First, they are so cool. Second, they sing nice songs. (既習の表現) If you are interested, I can tell you more about it. (教科書の表現)

④教科書本文のスキットより

A: Do you go to Chinatown?

B: I don't go to Chinatown. But I like meat. So I like nikuman. How about you? (帯活動より)

A: Yes. I go to Chinatown.

B: When do you go to Chinatown? (帯活動より)

A: I sometimes go to Chinatown on Sundays. It's so delicious. Do you go to Chinese restaurant? (教科書より)

B: Yes. I go to バーミヤン.

A: What Chinese food do you like?

B: I like gomadanggo. I like Chinese dessert. Do you want to go to Chinatown?

A: Yes. Because it's so exciting place. But I don't like crowded place. (教科書より)

B: What kind of food do you like in Chinatown? (帯活動より) I like *ebichiri*. I want to eat school lunch.

A: Me, too. Do you watch henmen? (教科書より)

B: No. How about you?

A: Me, too. But I watch henmen on Youtube.

⑤ 考察

語いを使った新たな活動の開発については、昨年度に現状の活動を分類した際は meaning-focused output と fluency development が少なかった。Nation は「four strands をバランスよく指導することを良い」としているが、教師が授業内で十分な input を行おうとするため、言語要素に焦点を当てた指導が多く、産出に焦点を当てた指導が少なかったと考えられた。適切な input 無くして、即興的な活動をさせることは生徒にとって負担が多く、達成感が得られなくなるだろう。そのため、十分な input や正しく文や語を使わせるため、言語に焦点を当てた指導も必要である。しかし、input や language-focused learning だけで終わらせるのではなく、output や fluency に焦点を当てた活動を同時に行うことで語いの定着に繋がる。今年度は output や fluency に焦点を当てた活動を開発したことで、授業内の活動のバランスが良くなり、生徒もその活動の中で input された語いを使おうとするため、語いの定着につながったと考えられる。新学習指導要領になり、語いの数が多くなっても meaning-focused input、meaning-focused output、language-focused learning、fluency development の4つの活動をバランスよく行い、語いの定着を図っていきたい。

また、効果の検証として生徒がスピーキング活動やライティング活動でアウトプットした表現まとめ、生徒にどうしてその語いを使えたのかインタビューを行った結果、生徒は教科書で習った表現をできるだけ活用しようとしていることが分かった。特に、文法事項はその傾向が強く、授業で習った文の形を使い、自分が言いたい語句は辞書などで調べ、表現することが多く見られた。また、教科書

に出ている表現でも生徒自身が必要と考えた場合、教師が例として紹介した表現も積極的に使っていた。これらのことから教師が活動を設定する際に、生徒がどんな表現を使いたいかということを生徒とやりとりしながら確認し、紹介していくことで生徒の使える語いや表現が増えていくと考えられる。

新学習指導要領になり、指導する語いが多くなっても音声から文字の順で指導をし、定着を図る活動を行い、生徒に教科書の表現や自分で使いたいと思う表現を使わせることで、今後も語いの定着を図っていきたい。